論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

氏　　名	井上　かおり	
学 位 論 文 名	長期療養高齢者の緩和ケア指針の開発	
学位論文審査委員	主　査	橋本　龍樹　印
	副　査	津本　優子　印
	副　査	原　祥子　印

論文審査の結果の要旨

長期療養高齢者の苦痛を緩和するためのケア指針を開発すること目的にし、彼らのエンドオブライフの質を向上させることを目標にした研究である。研究は3段階にわかれており、まず「長期療養高齢者の苦痛」の概念を明らかにするために文献検討を行った。第2段階として、看護師の苦痛に対する認識を明らかにする目的で、医療療養病床に勤務する看護師を対象に半構造化面接を実施した。最後の段階として、48項目の緩和ケア指針原案を作成し、その信頼性・妥当性を検討する目的で、医療療養病床に勤務する看護師を対象に質問紙調査を実施し、項目分析の結果に基づき選定した47項目について探索的因子分析を行った。その結果から、看護師が認識している長期療養高齢者の苦痛は、「病気の進行や廃用に伴う身体的苦痛」「自律の喪失に伴う苦痛」「ケアに伴う身体的苦痛」「尊厳に配慮ない扱いを受けることに伴う苦痛」「関係性の喪失や不確かな状況により生じる苦痛」を明らかにした。緩和ケア指針は43項目5因子の構成とし、第１因子【苦痛サインを捉える実践】、第２因子【苦痛を特定する実践】、第３因子【意向・ニーズを捉える実践】、第４因子【他職種と連携しながら苦痛を予防または緩和する実践】、第５因子【日常の関わりの中での高齢者の尊厳を守る実践】とした。解析の結果、内的一貫性は確保されており、併存的妥当性と構成概念妥当性を示した。これら３つの結果より、緩和ケア指針を開発し、その妥当性について検証した。これにより、長期療養高齢者の緩和ケアを日常生活に組み込むことにより、高齢者のQOLおよびエンドオブライフの質の向上の可能性を示した。一方、医療者のケアによって生じさせている苦痛、特に尊厳に配慮のない扱いが高齢者に精神的な苦痛を与えている場合があり、これらが過小評価されやすい現実があることについて、より深い考察が必要な部分があると考えられる。

本研究では、長期療養高齢者が直面している苦痛を明らかにし、それらを緩和するための指針を提言しており、画期的な研究であり、本論文は本学大学院医学系研究科博士後期課程の論文に値するものと判断する。

最終試験又は学力の確認の結果の要旨

以上の結果より、提出された論文の審査を含め、最終試験に合格したと判断される。